

狂犬病

狂犬病はズーノーシス(人獣共通感染症)で、人を含むすべての哺乳動物が感染し、世界中で発生しています。(図参照)

感染動物と流行地域

狂犬病ウイルスは、全ての哺乳動物に感染して、発病させることができます。しかし、狂犬病の流行は全ての哺乳動物にみられるわけではなく、地域によって異なります。

例えば、ヨーロッパではキツネの間で、アメリカではコウモリやアライグマ、スカンクなどの間で、流行がみられます。しかし、現在、人の狂犬病の95%は犬の咬傷による感染です。

世界保健機関(WHO)の報告によると、毎年5万人以上の人と10数万頭以上の動物が狂犬病によって死亡しているという現実があります。そのうち、人の死亡の90%以上はアジアで起こっています。

日本では

1920年代には、日本でも年間200人を超える人が狂犬病で亡くなっていました。しかし、ワクチン接種などの法律が制定され、1957年以来、国内の犬において狂犬病の発生はありません。

2006年11月~12月に、フィリピンで犬に咬まれた日本人が2名、帰国後に発症し亡くなりましたが、日本人の死亡は、36年ぶりです。

法律

日本では、狂犬病予防法で、生後91日令以上の犬は、登録をして毎年1回、4月1日から6月30日の間に狂犬病予防接種を受けるように規定されています。

しかし、実際登録されていない犬が数多くいると言われており、日本における正確な狂犬病予防接種率は把握できない状況があります。近年では、未登録犬を合わせると接種率は50%を割るともいわれています。

万一、犬が人を咬んでしまった場合、その犬が狂犬病でないか獣医師による鑑定が必要になります。

感染

狂犬病は、狂犬病ウイルスに感染し、発症した動物に咬まれることにより感染します。ウイルスは神経組織に侵入し、発症しますが、感染から発症までには通常数ヶ月かかります。つまり、感染してから、発症するまでには、ある程度の期間があります。

狂犬病は発症してしまうと、人も犬も100%死亡してしまう恐ろしい病気です。しかし、ワクチン接種により予防できます。万一、発症した犬に咬まれても、その後何回かワクチンを打つことで発症を抑えることができます。海外では毎年1000万人近い人が狂犬病の疑いのある動物に咬まれるなどして、ワクチン接種をしています。

発症した場合

犬では、感染してから発症するまで平均1~2ヶ月、時に1年以上にもおよぶ潜伏期間があります。発症した犬は、外からの刺激に対してきわめて過敏になり、狂躁状態を示して、目の前にあるもの全てに咬みつくようになります。犬ではこのような症状を示す狂躁型がほとんどです。

発症の10日位前から、唾液中に狂犬病ウイルスが出現するようになり、咬まれることで感染するのです。

病態は進行性で、次第に神経症状が顕著になって全身麻痺を示すようになり、最後は昏睡状態になって死亡してしまいます。発症した犬では、通常10日以内に死亡するといわれています。

日本の危険性

現在日本では、海外からの犬等の輸入に関して、狂犬病ワクチン接種やその他動物の検疫の強化をして、海外からの狂犬病の侵入への対策をしています。近年では、北海道や富山県のようにロシアや北朝鮮から船が着岸する湾岸部から犬が持ち込まれ、狂犬病が侵入する可能性があるとして監視が強化されています。

現在、万が一日本の犬に狂犬病が再発生した場合、蔓延する恐れや、ワクチン接種を希望する人が殺到するなどして、パニックが起こるのではないかと懸念されています。

そのようなことが起きないように、愛犬の登録、狂犬病予防接種を確実にし、接種率を高めることは、防疫上とても大切なことです。

